

琉球大学学術リポジトリ

琉球国後期（近世）

・近代旧慣期先島における租税制度（頭懸・人頭税）の社会経済史的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2019-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平良, 勝保, Taira, Katsuyasu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44890

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

琉球国後期（近世）・近代旧慣期先島における租税制度（頭懸・人
ずがかり
頭税）の社会経済史的研究

琉球大学大学院

人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

氏 名 平良 勝保

琉球国後期（近世）・近代旧慣期先島における租税制度（頭懸・人頭税）について、新しい視点・論点から、その解明に取り組んだ。従来の研究は、先島（両先島ともいう）という単位で、頭懸・人頭税について研究した論文はほとんどなかった。また、近世中期（1710～1711年）の奥武親雲上の頭懸・人頭税改革は大きな転換点であったが、『御財制』（1728年）や『御当国御高並諸上納里積記』（1750年頃）に依拠し、1659年（実際には1660年）に喜屋武親方が頭懸・人頭税の骨格を形成したと考えられてきた。奥武親雲上の改革、特に年齢による人位を決めるようになったこと意義について、十分に注意を払ってこなかった。しかし、村位・人位・分数を検討することによって、奥武親雲上の改革によって、近代旧慣期にいたる頭懸・人頭税の骨格が決定的となったことを明らかにした。

近世の租税制度は「頭懸」は、穀物（米・粟）と貢布が賦課される。また、夫遣い（労働力の徴発）もあった。近世先島のこのような租税制度は、王府や両先島の蔵元レベルの史料は一定程度残っており、賦課方法はこれらの史料に依拠して論じられてきた。しかし、賦課と村レベルにおける徴収には乖離があった。本論文では、村における賦課と取納から王府と薩摩藩を経由して、市場で貢納物が流通していることまで確認できた。特に、村における取納形態が石単位ではなく斤目で取納されていたことを明らかにしたことは、大きな発見であった。また、蔵元レベルや王府レベルの文書を丹念に検証し、穀物の一部はさまざまな種類の産物に転化し貢納されており、貢布も白上布・中布・下布だけで、多くの種類が貢納されていたことを述べた。貢租（貢納物）と市場との関係については、先島の貢布や産物は、沖縄本島地域の産物とともに、薩摩藩を経由して、大坂市場で流通していることを明らかにした。なかでも、先島の貢布は「薩摩上布」として、高値で取引されていた。

近代旧慣期の租税制度の検討では、村レベルの史料を発掘し、八重山島の四ヵ村と南5村の貢租と貢布の実態を明らかにし、宮古島の貢租と貢布については『沖縄県旧慣租税制度』や『貢反布調』を活用し、賦課の仕組みを明らかにするとともに、貢布織女の過重な負担について指摘した。また、近代の石高は、近世と違い先高（実納高）あることを明らかにした。民費についても検討し、は実質的貢租であり、人頭税として賦課され、近代に入ってから肥大化し、役人層の俸給が増えていったことを明らかにした。また、黒島村の貢租、八重山島の貢布の賦課と徴収についても、その実態を詳細に検討した。しかしまた、旧慣温存のなかで、いかにして役人層の俸給層が可能となったか、解明することはできなかった。

本論文には、各章毎に新しい知見があるが、個々の知見よりも、大きな意義は、①宮古島と八重山島を等しく検討したこと（実際には八重山島の検討が多い）、②琉球国後期（近世）・近代旧慣期先島を連続性のなかで検討したこと、③貢納物の市場への流通を発見したこと、貢租の約65%を占める貢布について丹念に検討したこと、に画期性があると考えられる。新しい知見は、この3点の組み合わせによってこそ、生まれた。

しかし、新しい文書が公開されるようになり、公開されている文書も活字になっているのはごく一部のみであり、課題も多い。
